MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．５．３　発行元
第 473 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

中山七里『殺戮の狂死曲』

３月に講談社から『御子柴弁護士シリーズ』の最新刊『殺戮の狂死曲』が出た。『小説現代』に一挙掲載されたものなので、中山作品としては比較的短い方。いつもながらに、結末で待っているものは…。

中山七里『御子柴シリーズ』
1．贖罪の奏鳴曲
2．追憶の夜想曲
3．恩讐の鎮魂曲
4．悪徳の輪舞曲
5．復讐の協奏曲
6．殺戮の狂詩曲

これまでのシリーズの流れ…

本シリーズの最大の読みどころは弁護士・御子柴礼司がいかように動き、事件に立ち向かうかということ。御子柴は十四歳の時に幼女殺害事件を起こしているにも関わらず、その後勉学に励み弁護士資格を取得している異色の人物。世間的には「死体配達人」と呼ばれ、非難の的にされているが、裁判となると奥の手を使ってでも被告に有利な結果を引き出すので、一部には頼りにされている面もある。

御子柴が何を考えているのかは途中で明かされることはないので、読者は結末まで一気に引っ張られていってしまうことになる。

高齢者施設での凶悪事件

毎回、社会的に大きな話題になっている事象に関連させた物語作りが成されている。今回は神奈川県の津久井やまゆり園で起きた障碍者施設殺傷事件を一番の土台としているものの、他の要素も巧みに組み込んで話を展開させている。

物語の舞台は「幸朗園」という介護付き高級老人ホームに設定されている。入居一時金も月額利用料金も高額。上級国民御用達。ただ、介護する方にとっての大変さは変わりない。入居者とのコミニケーションは取りづらく、逆に暴力を振るわれることも…。ひたすら体力・気力の勝負になることも多い。

この施設の職員・忍野忠泰がある夜包丁を複数本持って施設に入り込み、入居者全員を殺害しようと行動を開始する。９人を殺害したところで取り押さえられる。

犯人の忍野は自分の行為は社会正義であると主張する。「生産性のない金持ち老人を殺害することは世の中の賛成を得られるはず」と思い込んでいる忍野は世間では「バケモノ」と呼ばれることになる。

御子柴の考えていることは何？

その「バケモノ」の弁護人として乗り出すのが御子柴。「死刑」以外は考えられない裁判にどう臨むのか。通常は精神鑑定において心神喪失など責任能力の有無を争点にするパターンだが、忍野本人はそれを望まない。自分の責任能力は正常だというのだ。

御子柴の活動は関係者に話を聞いて回ること。亡くなった９人にはそれぞれの人生があり、家族がいる。人々の受け止めは千差万別なのだが、忍野が死刑になるのは誰しもが当然と考えている。

認知症の症状が出て、家族だけでは面倒を見きれなくなるのは今の世の中では当然の現象。施設に入れても愛着が消えることはなく、「生きていてほしい」という願いは多くの人が持っている。

結末は結末として…

物語なので結末はつけなければならないから、本書の結論はこれでよいのかもしれない。ただ、読み終えてスッキリしたかと言えばそうでもない。「生きることの意義」は読者自身が考えるべきことなのだろうとも思う。「凶悪な事件」「残虐な犯人」という単純さではない何かを考えていければ…。

羽生飛鳥『揺籃の都　平家物語推理抄』

昨年６月に東京創元社ミステリ・フロンティアから出た本。一昨年に出た『蝶として死す・平家物語推理抄』の続編なのだが、実際は本書の方が少し前の時間設定になる。頼朝が挙兵し、平清盛が一時期都を京から福原に移した治承四年(1180 年)の出来事。『蝶として死す』は木曾義仲により平家が京都を追われてからの話。本書は長編である。

清盛が福原に遷都した後、急ごしらえの都は物の怪騒ぎが頻発していた。ある貴族に仕える青侍が「平家が没落する夢」を見たという噂が広まり、清盛は異母弟の平頼盛にその青侍を捕らえるように命ずる。この頼盛が探偵役。母親の関係から頼朝と内通しているのではないかと清盛から疑いをかけられているのを知りながらも懸命の探索に乗り出す。ところが青侍は清盛邸の中に逃げ込んだ様子。そして、次の日の朝にはバラバラの死体となって塀の外で発見された。雪が積もっていて周りには足跡はない。下手人探しの問題に続いて、宝の刀が消え、祈祷所でお籠していた巫女の小内侍が危害を加えられる事件などが連続して起きる。祈祷所は密室で図入りで示してある。前半は清盛とその息子達(宗盛・知盛・重衡)中心の歴史小説の色合いが濃く、後半は事件の謎解きが中心になっていく。歴史的な背景を理解して読むとより楽しめるだろう。